

「気付いてあげることが大事」と話す平成国際大学の鈴木翔也さん。18日午後、加須市役所



～みんな(産・学・官・民)で考えよう～ ヤングケアラー支援

加須市役所で18日、ヤングケアラー支援をテーマにした産・学・官・民の4者による意見交換会が開かれた。約40人が参加。平成国際大学の学生が「学生からみたヤングケアラー」を発表したほか、埼玉りそな銀行と市が取り組みを話した。

平成国際大3年の鈴木翔也さんは「親の介護をするヤングケアラーと接したことがある」とした上で、「助けを求める場所の一番は学校。教員が気付いてほしい。子どもが発言できる環境もつくるべき」とした。

また、「親の代わりに食

加須 ヤングケア支援で連携 産・学・民・官が意見交換

事を作り、きょうだいの世話をしたりしているのもヤングケアラーになる」「私たちは年齢が近い分、話しやすい。学生による相談会を定期的に行えば居場所づくりになる」など、学生ならではの発言もあった。

埼玉りそな銀行サステナビリティ推進室の鈴木学さんも「居場所づくり」を中心に話した。「当行では、(越谷氏の)せんげん台支店3階に子ども支援拠点がある。8月下旬にはさいたま市の本社横の旧社内保育所を居場所にする予定」と話した。

市子ども局すくすく子育て相談室の高原泰浩さんは5月に行った「ワーキンググループ会議」の結果を報告した。「ヤングケアラー支援条例の検討を行う中で役割を明確化する。連携強化や情報共有を定期的に実施する」とした。意見交換会には、加須市子育て応援子ども食堂・フードパントリー団体連絡会や学校関係者などの代表も参加。連携することを確認した。

次回は、9月中旬に行う予定。ヤングケアラー支援体制や新規事業について意見交換する。(江利川義雄)